

井内山古戦場と小鴨神社おかも②

前回は、伯耆国（鳥取県西部）の小鴨氏が村尾氏と戦って敗れ、長藤の井内山に落ち延びて隠れていたところを追撃され、この地で自害し、小鴨神社として祀られたという伝説を紹介しました。

この小鴨氏と村尾氏の争いの記録は一二世紀後半、平安時代末にさかのぼります。この頃中央では源平合戦の最中で、地方の武士団も源氏・平氏双方に分かれて争いが行われていました。『吉記』という公家の日記の寿永元年（一一八二）八月

二〇日条には

「風聞によれば、伯耆国の住人・村尾成盛が小鴨介基保と合戦し、基保は追い落とされ幾千人もの死者がでたという」

という記述があります。小鴨氏は伯耆国庁（倉吉市）より南の小鴨川流域に形成された小鴨郷を拠点とする在地の豪族で、名前に「介」の字があることから、国府に仕える在庁官人だったことがわかります。一方の村尾氏は、元は紀氏を名のる中央貴族の出で、伯耆国の長官である



伯耆国庁跡（倉吉市）



現在の長藤五輪塔群

伯耆守として赴任後に土着した豪族だったようです。この争いは、当時伯耆国が平氏の知行国であったことから、在庁官人である小鴨氏が平氏方につき、日頃から対立していた村尾氏と争ったと解釈できるとでしょう。

養和元年（一一八一）に書かれたといわれる『伯耆大山寺縁起』には「当国に村尾・小鴨とて二人の大將東西に権をあらそひける」とあり、当時この両氏が伯耆国内を二分する勢力を持ち、互いに争っていたと思われる。また、同じく当時の公家の日記『玉葉』の寿永三年（一一八四）二月二日条に

「伝聞では、平氏が都落ちした後、伯耆国美徳山（三徳山）に後白河法皇の御子と称する者が現れ、伯耆国半国を治めるほど勢力を拡大し、村尾成盛はこの御子を奉ったが、小鴨基康はこれに従わなかつた」（大意）

とあります。「基保」と「基康」は同じ「もとやす」で同一人物を指すものと思われませんが、ここでは反平氏勢力に村尾氏がつき、それに反目する小鴨氏という構図が見えてきます。しかし、『源平盛衰記』の記述では、寿永三年に都落ちした平氏が挽回を図り一ノ谷（現神戸市）に陣を構え、西国の豪族に参陣を呼びかけますが、伯耆国からは小鴨介基康、村尾海六（成盛）、日野郡司義行がこれに応じて共に平氏方に従ったことが書かれており、小鴨氏と村尾氏は明確に源氏方・平氏方に分か

れて争っていたわけではなく、伯耆国の支配権を巡り時の状況に応じて立ち回っていたことが想像できます。両氏のその後については、史料が残されていないためその動向はよくわかりませんが、『倉吉市史』によれば、小鴨氏は鎌倉時代末の元弘の乱（一三三一）で、幕府側についていることがわかっており、平氏滅亡後は鎌倉幕府の御家人として代々続いたようです。村尾氏に関しては不明ですが、おそらく小鴨氏と勢力争いに敗れ衰退の道をたどったのでしよう。

長藤の伝説の元となるのは、『吉記』にある寿永元年の争いだと思われませんが、史実では小鴨基保はこの戦いで戦死せず、小鴨氏自体も存続しています。長藤の伝説がこの争乱を元以後世の脚色を加えて現在に至るのか、または記録に残っていない同様の事件があったのか、そのあたりはわかりませんが、小鴨氏と村尾氏の争いが隣国の美作北部にも何らかの影響を与えた可能性は考えられます。

参考資料：『倉吉市史』『吉記』『玉葉』『源頼信と河内源氏の展開過程』

生涯学習課 日下

電話(0868)54-7733